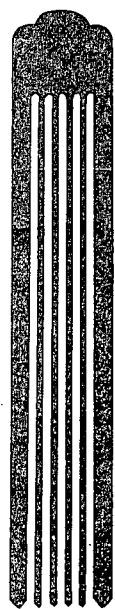


長さ九寸餘、幅二寸五分餘、木にて作りたる物、作りさま古朴なり、木の質辨じがたしとぞ、



此圖を視れば、伊弉諾尊櫛の男柱をかきとりて、火に燭し玉ひて伊弉册尊の屍を照し、視玉ひしも、彦火々出見尊のうがやふきあへずのみことの生れ玉ふ所を視玉ひしほどの間ありしも、櫛の大きにて實にとぞおもはるゝ、又黄泉段のところに、櫛を引かきてなげうち玉へば、生笋なりとおもひて、醜女が抜食しも、おのづから櫛の形ち見ゆ、但しなげ玉へば、神通にてそのまゝ其物となりしなり、

〔日本書紀神代〕一書曰、兄火酢芹命、能得海幸、弟彦火火出見尊、能得山幸、時兄弟欲互易其幸、故兄持弟之幸弓、入山覓獸、終不見獸之乾迹、弟持兄之幸鈎、入海釣魚、殊無所獲、遂失其鈎、是時兄還、弟弓矢而責已鈎、略時有一長老、忽然而至、自稱鹽土老翁、乃問之曰、君是誰者、何故患於此處乎、彦火火出見尊、具言其事、老翁即取囊中玄櫛、投地、則化成五百箇竹林、因取其竹、作太目籠、籠内火火出見尊於籠中、投之于海、

櫛製作

〔延喜式内藏十五〕年中所造御梳三百六十六枚、二百枚御料、百枚中宮料、六十枚春宮料、並六月十二月、各所須調布一丈六尺、紙冊八張、木綿大五兩二分、木賊大三兩、柳宮四合、三月中旬具數、申省、仍令工手依例造備、訖每十枚分爲一裹、裏以白紙、結以木綿、十裹盛柳宮納漆櫃、敷白、安漆牙牀案、覆以黃表、帛裏、訖六月一日、准此十二月、先進奏狀、内侍執奏、即寮官四人執案、進立殿庭、少退而立、于時内侍宣持參來、寮官一人稱唯共昇案、進詣階下、執宮進内侍、訖昇案退出、亦准此但六月十二月、神今食、十一月新嘗料、各付縫殿寮、其東宮御梳、裏以白紙、結以木綿、訖盛柳宮安高案、敷白、先進啓狀、坊官執啓、即寮官二人執案、進立殿庭退出、舍人受案送寮、

〔倭名類聚抄二十〕柞 四聲字苑云、柞、音柞、一名由、漢語抄云、波々會、木名、堪作梳也、

〔人倫訓蒙圖彙五〕櫛挽 櫛は伊須黃楊等其外諸の唐木、象牙、玳瑁等をもつて造り、蒔繪金具をも